

佳作

バンド・シテイ・津島

松宮 信男

八月中旬の曇天の空は、午後七時を過ぎてもまだ明るく、日中の残暑の名残を留めている。私はもう三十分も、名鉄津島駅前で待たされていた。

『あいつは何時も勝手だ。いや、勝手だった……』

JR京都駅中央口前で、高速バスに乗り込んだ時から、何度も呟いてきた言葉をまた頭の中で繰り返す。

日比野繭子が、昨日の朝いきなり携帯に電話をかけてきて、『明日の土曜の午後七時に、名鉄の津島駅まで来てくれない。大事な話があるから』

と言った時、つい承諾してしまった。そして、京都から繭子の実家がある津島市まで、一番安く行くにはどうしたらいいかを、ネット検索していた。自分の中に拒否する気持ちがあるが、全くなかったことに気が付いたのは、後になってからだった。

私が初めて繭子に会ったのは、京都市立芸術大学大学院・修士過程・指揮専攻一回生の「オーケストラ実習」の時だ。

学内で音楽ホールとして使われている講堂のステージ上、学生オケの下手側一番奥のティンパニ奏者の位置に、長い髪の美しい美少女が控えていた。それが繭子だった。

実習曲は、ドミトリー・ショスタコービッチ作曲、交響曲第五番『革命』の第四楽章。

正直言ってあんな女の子に、革命の激動を象徴するあの猛々しい楽譜が叩けるのかと不安になった。

ステージの下手端に立つ指導教授のところへ行き、小さな声でそのことを告げると、

「まだ学部生だが、とても音楽的感性が豊かなので、定期演奏会のメインプログラムの奏者として採用した。彼女なら大丈夫だよ。立派にティンパニ奏者としての役目が果たせる」という自信に満ちた言葉が返ってきた。

定期演奏会の本番は、指導教授が指揮をする。自分が振るオケのプレイヤーに、腕が拙い人間を使うことはないだろうと思いき、自分を納得させた。

それにこちらの研究活動のため、学生オケのメンバーには貴重な練習時間を割いて協力してもらっている手前、文句が言える立場でもなかった。

普段は、二台のピアノを前にして、指揮のレッスンを受けている。フル・オーケストラを指揮できる機会は、専門課程の大学院生といえどもめったにない。

気持ちを切替え指揮台上上がり、一気に指揮棒を振り下ろした。その瞬間、ステージの空気が一変した。

凄まじい眼光で私を睨み、両手のマレット（撥）でティンパニを堂々と叩く繭子の勇壮な八分音符が、オケ全体を完璧に支配していた。指揮者でありながら、その気迫の凄さに一瞬気押されたことは事実だ。

それ以来、恋人同士になってからも、彼女には押されっぱなしだった。初めて「関係」した時も繭子主導だったし、その後二年間の恋愛期間の全てが、彼女中心に動いた。

にもかかわらず、繭子の大学卒業時に私が結婚話を切り出すと、

『私は津島に戻って、父の打楽器工房を継がなきゃならないの。プロを目指す高梨さんとは生きる道が違うわ』

と言い、あっさり私から離れていった。

以後、電話やメールで幾ら誘っても、決して私と会おうとは

しなかった。

こうして繭子から解放され、真剣にプロの指揮者になるため、学業に専念できたのは、大学院・博士後期課程の三年間だけだったといつてよい。

だが、幾つかの指揮者コンクールに挑んでみたものの、何の成果も出せず、

『繭子にはすつかり人生を狂わされてしまったな』

と根拠のない恨み言を幾度となく呟き続けた。

その院生生活も来年の三月で終わる。将来に全くあてがなく、単位取得満期退学が決まっている。

名鉄の赤い車両が、高架の上を走っているためか、津島駅の駅舎は二階建ての平たい建物になっており、高架に沿うように左手に伸びている。

駅のロータリー広場の前を、この都市の目抜き通りである天王通りが走り、その左側の建物には「津島ガス」の青い字が、右側の建物には、白地に赤の「愛知銀行」の看板が見えている。

実は、私が津島市を訪れたのは、この時が最初ではなかった。付き合い始めた年の十月、繭子に誘われて「尾張津島秋まつり」を見に来たことがあった。

当時、駅前広場には多くの山車（だし）が並び、からくり人

形の妙技が繰り広げられたり、車切（しゃぎり）と呼ばれる山車を回転させる祭りの出し物が披露され、けっこう楽しむことができた。

中でも特に興味を引かれたのは、石探祭車（いしどりまつりぐるま）と呼ばれる山車より小振りな、まるで平安朝の牛車を思わせる三輪車の数々による和楽器の競演だった。

石探祭車の後部には和太鼓が嵌め込まれていて、その両側に一つずつ大きな鉦（かね）が吊るされている。常時三人の囃し手で演奏され、太鼓の叩き手は次々と入れ替わる。

繭子も当日、緋色の法被に白い股引と地下足袋姿という祭装束で現れた。

長い髪を頭の上に結い上げ、手ぬぐいの鉢巻きできりりと引き締めている。顔に施したメイクも艶めかしく、何時もの彼女とは違いとてもセクシーに見えた。

同じ色の法被姿の十数人の男たちに交じって、ホイッスルを吹き鳴らしながら太鼓を打つ繭子の姿は、「熱狂する女神」と呼ぶに相応しいほどエキセントリックだった。

彼女が叩く、太鼓の七拍子のテンポが上がるに従い、両端の鉦の囃し手や時折声を発し手を挙げる取り巻き連中たちのテンションも上がっていき、より狂乱の域に達した。

そんな彼女の凄まじい眼光の輝きは、初めて会った時のティンパニを連打する繭子を彷彿とさせた。そして、その抜群の音

楽センスは、この祭りによって子供の頃から育まれたものに違いないと確信した。

私たちが、肉体関係を持ったのは、その夜のことだった。付き合い始めてから、既に半年近くが過ぎていた。

繭子の実家は、この祭りに使う和楽器の製作や修理を行う楽器工房を、何代も前から津島で営んできたという。

オーケストラのプロ打楽器奏者に十分になれるほどの実力を持ちながら、打楽器工房の跡取りになるため、私の元を去り津島に帰郷した彼女の「郷土愛」が、あの「尾張津島秋まつり」の熱狂に根差したものであるとするならば、当然の成り行きだと思われた。

それにしても、繭子に急に呼び出され、再び訪れた津島駅前広場の様子は、秋まつりの時と同じ場所とは到底思えないほど、閑散としていた。

広場に並べられた多くの山車や石探祭車。打ち鳴らされる和太鼓や鉦。方々で吹き鳴らされるホイッスルや合いの手の掛け声。広場を埋め尽くした大群衆の歓声と溜息。それらの全てが、過去の幻影として、脳裏に蘇る。それほど、数年前のあの秋まつりの体験は、強烈なものだったことに気が付いた。

あの夜、祭りの熱狂を身体に留めたままの繭子に誘われるように、タクシーで乗り付け宿泊したシテイ・ホテルは、何処だ

つたのだろうと考えた。

彼女から、どんな話があるにせよ、もはや二人の仲が元に戻ることはない。

それならば、かつての思い出に浸れるあの場所を今夜のねぐらにしたいと、生温いことを考えていた時、急速度で走つてきたワンボックスカーが、私の前に停車した。ドアに『津島打楽器工房』と印字されている。

窓が開き運転席の女性が、

「お待ちせ。乗ってちょうだい」

と声を掛けてきた。

一瞬それが繭子だと、分からなかった。

三年ぶりに会った彼女は、長かった髪をショートにカットしている。

「ね、早くして」と急かすその語気が、思い出の中の繭子と重なった。

急かされてドアを開け、車に乗り込んで助手席に座ると、車内には重苦しい短調の弦楽合奏の調べが流れ、即座に二人だけの密閉空間が現出する。

久しぶりに会って、どう声をかけていいか分からず、挨拶代わりに

「この演奏は、ユーリー・テミルカーノフ指揮のサンクトペテルブルク・フィルハーモニーか？」

と問いかけた。

「そう。交響曲第五番『革命』の第三楽章」と答え、彼女は車を発進させた。

この曲のスコアは、完全に頭に入っている。私が一番好きな曲だ。あと数分で猛々しい第四楽章を聞くことになるだろう。運転しながら繭子は、「急にごめんね」と言い、続けて「その後、将来の見通しは立った」と聞いてきた。

私は、

「ブザンソンに応募したけど、エントリーさえされなかった。PMFにも落されたし。もうどうしようもないよ」

と答え、津島市街地の風景に視線を泳がせた。

「高梨さんは、才能はあるけど音楽的カリスマ性が欠如しているのよ」

これは大学院時代に、指導教授からも散々言われたことだ。

「初めて指揮台で見た貴方は、とても輝いてたのに。付き合ってみると、ぐだぐだ、うじうじした男で、本当に見込み違いだったわ」

と言い、繭子は一頻り笑う。

「俺とのこと、後悔してるのか？」

私は恐る恐る聞いてみた。

「もしそうなら、今日呼び出したりしないわ」

即座に答えた彼女の声から笑いが消える。

その言葉聞き、

『三年の間、俺を避けてきた繭子に、一体どんな変化があったのだろうか？』

と考えた。

「来年から、どうするの。後期博士課程も終わりでしょ？」

何故か探るような聞き方をしてくる。

「何も決まってるない。数百万円の奨学金の返済も始まるし、本当に頭が痛いよ」

「もうプロは諦めて、吹奏楽の指導者になったら。オケだけが指揮をする現場じゃないでしょ」

「それも考えた。だがスクールバンドの顧問に空きがない。音楽の教師は、どこも狭き門だからな。……ところで、実家の打楽器工房の方はどう？」

私は敢えて話題を切り替えた。

「何とかやってる。今では和楽器だけでなく、洋楽のパーカッションも扱い出したの。父を含め五人の職人たちと愛知県内にある中高吹奏楽部の楽器の修理で、毎日走り回ってるわ。オリジナルのティンパニ・マレットも造ってて、ネット通販で、けっこう売れてるのよ」

久しぶりの再会にしては、こうはきはきと標準語で、早口に捲し立ててくる彼女の態度に呆気にとられた。

本来繭子は、恐ろしく耳がいいため、初めて会った時から、

アナウンサーが喋るような完璧なアクセントとイントネーションで標準語を話していた。大学時代を通じて、常にそうだった。だが津島の人達とは、きつと土地の言葉を使っているに違いない。一度それを聞いてみたいと思った。

「お父さんと地元の両方に貢献ができて、芸大に進学させてもらった甲斐があったな」

「もちろん。今に、この都市を東海一の『バンド・シティ』にしてみせるわ。そのためにはまず、津島市市民吹奏楽団を日本一のスター・バンドにしなければ」

その言葉からは、高揚した心情が伝わってくる。

彼女は、地元の中・高時代に、吹奏楽部で、パーカッションという洋楽楽器に親しんだ。その音楽的才能を認められ、顧問の勧めで京都の芸大に進学したのだ。

大学を卒業し帰郷してからは、津島市を拠点とする「津島市市民吹奏楽団」で音楽活動を行い、そして楽団長に就任したことなどを、私はメールのやり取りで知らされていた。

信号が赤になり、横断歩道の停止線で車が止まった。

市街地は、ようやく暮色に染まり始めていた。左手に大型スーパーの建物があり、土曜日の夕方の所為か、人々の出入りが著しい。住まいから遠く離れた土地に来た侘しさにとらわれ感傷的な気分浸っていると、繭子が誇らしげに言い放った。

「私のバンド、全日本吹奏楽コンクールの県大会で代表権が取

れて、東海大会への出場が決まったの」

「それは凄いな。おめでとう」

私は素直に讃えた。

日本は、アメリカと並ぶ吹奏楽王国である。都道府県のコンクールで勝ち抜き、東海大会などの支部大会へ進出することは、大変難しい。

「自由曲は、交響曲第五番『革命』の第四楽章。貴方の一番得意な曲よね」

ちようど車内に、第三楽章終末のハーブのピチカートによる旋律が静かに流れている。

「今年こそ、悲願の全国大会出場を果たさなきゃ。でも、音楽監督が脳溢血で倒れて、東海大会で、指揮ができなくなったの」

弦楽の弱奏が消え第三楽章が終わり、車内は無音になる。

お互いの沈黙が、重苦しい。

「高梨さん。津島に来て、市民吹奏楽団の指揮者にならない」

繭子は重大なことを、いともあっさり口にした。

私は無言で彼女の顔を見返す。

煌めく彼女の鋭い眼光が、本気であることを物語っている。

私が返答に窮していると、車内に管楽器とティンパニによるトゥッティの強奏が鳴り響き、第四楽章が始まった。

信号は既に青に変わっている。

「貴方がもし、東海大会で指揮して、全国への出場権が取れた

ら、市民吹奏楽団の常任指揮者のポジションと地元の高校の吹奏楽部の顧問を譲ると、音楽監督が言ってるの。とにかく今日振ってみて。津島市文化会館で、今楽団員全員が待ってるから！」

フォルテシモで鳴る楽音に負けじと、繭子は大声で『宣告』

し、再度車を発進させた。

「そのために、今日俺を呼んだのか！ まるで陰謀だな」

余りのことに私は叫んでいた。

「革命よ！ 革命！ 高梨さんにとっても私にとっても！ 私たちの歩むべき道がやっとなつていなくなるの！ こうなるまで、ずいぶん時間がかかったけど」

「どういうことだ？」

「プロの指揮者になるのが、貴方の夢だったでしょ。私はそれを邪魔したくなかったの」

「だから俺から離れたのか」

「結婚を持ち出すんだもの。私と一緒にいるなら、津島に骨を埋めてもらわなきゃ」

「確かに当時、二人の歩むべき道は違ったが……」

私は、そこで言い淀んでしまった。

「この三年間で、指揮者としての可能性は十分試したでしょ。

私たちのこと、もう一度考えてみない」

「つまり……、あの時のプロポーズは、まだ有効だと思ってい

いのか？」

「それは貴方次第ね！　まず自己変革が必要だわ！　指揮者としても、男としても！」

「だから『革命』と言ったのか。わざとこんな曲まで流して！」

私たちは、金管楽器の咆哮と打楽器の強打に掻き消されないよう、自然に怒鳴り合うような大声で会話をしていた。

やがて、暮れ行く住宅街の道路の一角に、津島市文化会館の豪壮な建物が見えた。

津島という地方都市に、こんな巨大な文化施設があることに驚き、本当に今から此処で、指揮棒を振るのかと思うと、私は急に緊張してきた。

津島市文化会館大ホールの上ステージ上には、六十名近くの楽団員が、準備を整えて待機していた。

無人の客席には、音楽監督と思われる初老の男性だけが、車椅子に座ってこちらを見守っている。

繭子が私のことを全楽団員に紹介し、私が簡単に挨拶した後、さつそく合奏することになった。

首席クラリネット奏者がB♭の音を鳴らし、全ての楽器がチューニングを始める。

私は下手の臨時階段を使い、ステージの上の指揮台へと進ん

だ。

インスペクターが、「マエストロ。これを」と言っただけでスコアへと指揮棒を渡してくれた。

その二つを受け取った時、『これでプロへの夢が断念出来た』と感じた。さらに、『繭子と一緒に津島で生きていく決心もついた』とも思った。

指揮台の上から、各楽器セクションを見渡す。メンバー全員、その顔の表情には、こちらに挑んでくるような気迫が感じられる。

この中には、石探祭車の囃し手が多く含まれているに違いない。私の役割は、あの祭りの熱狂を、ステージの上で再現させることだ。それだけのカリスマ性を発揮しなければ、楽団の指揮者は務まらない。

お互い初めての顔合わせだ。勝負は、指揮棒の最初の一振りで見決まる。決して臆してはならないと自分を戒めた。

雛壇最上壇に、打楽器セクションが一行に並び、センターのティンパニ奏者の位置にあの時同様、繭子が控えている。目が合うと両手でマレットを示し、につこり微笑んだ。あれが『繭子オリジナルのマレットか』と思う。

少し心が和んだような気がする。いきなり呼び出して、強引に指揮台に立たせておきながら、私をリラックスさせようとしているのが伝わってきた。

チューニングが完了し、ステージ上が無音になる。

私は指揮棒を構え、素早く息を吸い込むと一気に振り下ろした。

冒頭の全音符がクレッシェンドし、繭子の叩くティンパニが、八分音符を力強く刻み始めた。

金管楽器群の勇壮な第一主題を聞きながら私は心の中で、『革命だ！ 革命だ！』と叫びながら指揮をした。革命の勝利の凱歌を表す重厚なサウンドが、大ホール全体に熱狂的に快く響き渡っていた。

〈了〉